

〔コメント〕

## 千田 稔報告によせて

伊藤 寿和

このたびの千田氏の報告は、1992年に刊行された『地理』37巻9号の特集「都会と田舎」において、「〔都〕—〔鄙〕関係の構造」と題して展望された自身の論点に関して、さらに関連の史料を収集され、日本の古代における「キナカ（田舎）」の成立、すなわち、「キナカ（田舎）」という言葉の成立と、その認識の成立という、従来の歴史地理学が全く等閑に付してきたすこぶる重いテーマに関して、正面からの解説を試みられたものである。

千田氏は、本報告の当日に配布されたレジューメのはしがきにおいて、「日本の都市—農村関係は、単に経済的、あるいは中心集落論のような伝統的な地理的機能論では読み取れない意味の空間構造を形成してきた事実こそ地理学は目を注ぐべきであった。それはまた、地理学の方法論にもかかわることであって、都市—農村関係のみならず、空間の諸関係を根底から問い直すことでもある。」と明言されている。

本報告の核ともいえるこの一文を熟読し、また、『古事記』や『日本書紀』や『万葉集』などの豊富な関連史料に基づく千田氏独自の解説と解釈を拝読・拝聴しつつ、以下のふたつの点に関して、古代日本の歴史地理学的研究を続けている評者にとっても、多くの反省すべき点と今後進むべき道をご教示いただいた。

まず第一に、無論、評者を含めて、これまで積み重ねられてきた古代の日本に関する歴史地理学の研究は、結果として、現代的な機能論の立場から古代の空間構造を復原・解説してきたのではないのか。古代の歴史地理学が主要な研究テーマとしてきた条里制や都城をはじめとして、国府や直線古道などの研究もまたしかりである。現代とは異なる古代の価値観に基づいた空間構造の復原や解説を、我々は真剣に心がけてきたか否か。「空間関係が地理学でいかに皮相的に議論されてき、今後いかに議論されるべきかは、おのずから明らかであろう。」との千田氏のまとめの文は、しっかりと心に留めおくべき一文であると判断される。

本報告のテーマとも重なる日本の都城に関しては、当時の価値観を研究の基礎に据えた足利健亮氏や千田氏などの研究蓄積もすでに存在するが、他の研究テーマではどうであったか。この論点は、古代の歴史地理学的研究の根幹を大きく左右するだけに、今後さらに多くの研究者によって、慎重かつ大胆に議論され、個別の地域に密着した具体的な研究によってさらに深められねばならないことは多言を要さない。

第二に、これまでになされてきた古代の日本に関する歴史地理学的研究の大半は、これまた結果として、畿内および律令国家体制を中心に据えた「中央史観」に基づいた古代の空間構造の復原と解説に終始してきたのではないのか。都城や国府は無論のこと、条里や直線古道など、これらの大半は律令国家が立案・施工したものであり、現代的な機能論・景観論と中央権力に基づく「中央史観」によって復原と解説がしやすい研究テーマを、古代の歴史地理学のメインに据えて良しとしてきたのではないのか。古代の律令制度という大きく画一的な網から漏れ落ちてきた地域の差異とそれら相互の関連にこそ、我々研究者は今後より留意すべきであろう。

このたびの千田氏の報告は、上記の二点から、古代日本の空間構造の成り立ちとその変化を根本から問い直そうとしたものであった。根本から問い直す場合には、中央（都・畿内）から地方（キナカ・ヒナ）を見る場合と、地方から中央を逆射する視点に大別することが可能である。千田氏の報告は、前者の立場から、上記の諸史料の他に『風土記』や『伊勢物語』など、従来の研究では積極的に利用されてこなかった文学作品などの多様な資料を意欲的に逐一検討されつつ、都（畿内）に絶対の価値基準を置いていた貴族層の空間構造の復原と解説を試みられたものである。この場合、古代においては、まさに「神」であった天皇の住む神聖な空間が「都」（広義には畿内を含む）であり、他の都市一般の概念と本質的に混同してはな

らないとの指摘はすこぶる重要である。

千田氏は、天皇の居所である「都」すなわち「アマ(天)」をキーワードに据えつつ、それに対立する空間概念として「ヒナ」と「アヅマ」の成立を検討し、それぞれの差異を丁寧に解きほぐしながら、日本における「都(みやび)」の成立と、対立項としての「ミナカ(田舎)」の成立を検討されたのである。

古代の日本において形成された独自の空間構造の復原と解釈、およびその変化の解明をめざす歴史地理学において、どうしても避けて通れない大きな課題とこれから進むべき道筋の一端を、千田氏は我々後に続く者たちに提示されたと理解したい。期せずして、佐賀大学で開催された一昨年の学会創立40周年の特別発表において、会長の服部昌之氏が「7・8世紀日本の地域問題」と題し

て、都城と畿内、隼人と南九州、蝦夷国と東北地方、東国・坂東について詳細に論じられた。もとより、検討された諸史料や論点も千田氏とは異なるが、古代日本の歴史地理学の研究を長らくリードしてこられた両氏が示された、これから進むべき研究の道筋の近さをかみしめた次第である。

千田氏に続く野間氏の報告においても、東南アジアを事例として、ヒンズー的コスモロジーと仏教的コスモロジーの差異と、都市の景観形成に及ぼしたその影響が論じられ、コスモロジーの下における聖(都市)と俗(田舎)の問題にも言及された。千田氏と野間氏の意欲的な報告を拝聴しつつ、古代日本の空間構造を東アジアのコスモロジーの中に位置付ける必要性をさらに痛感したこと頻りであった。

(日本女子大学文学部)